九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

産科業務における助産婦の性別役割意識

平田，伸子

野口，ゆかり

https://doi.org/10.15017/282

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 27, pp.31-35, 2000-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan
バージョン：
権利関係：

九州大学医療技術短期大学部紀要，2000，第27号，31 − 37
Memoirs Kyushu U. Sch. Health Sci., 2000, vol. 27, 31 − 37

産科業務における助産婦の性別役割意識

平 田 伸 子　野口ゆかり

A Survey on Hospital Midwives' Sense of Jender Role

Nobuko Hirata, Yukari Noguchi

Abstract

This paper describes the results of survey on hospital midwives' sense of jender role, and the discussions were made on how they perceive maternal ideology based on recent ideas of feminism. Results of survey revealed that midwives working in hospitals have concept of maternitty different from that of so-called maternal ideology. Furthermore they also revealed that their concept of sexual role is different from that of the general and traditional idea of specialization. They, however, did not consider their works from the standpoint of gender. From the studies, the necessity of expansion of idea of maternity for the support of women's health has been suggested.

Key Words : midwives, jender role division, reproductive helth and right, myths of motherhood

Ⅰ．はじめに

近年，女性の人権という視点から女性の健康が提唱されるようになり，国際人口開発会議(1994年)，国連世界女性会議(1995年)以降，リプロダクティブ•ヘルス/ライツとして国際的にも共通認識がなされるようになった。また，一方では，フェミニズムの実践的•理論的研究の進展によりジェンダーやセクシュアリティ，リプロダクションの問題が現代の思想にまで影響を及ぼし始めてきた。これらのことから，「母性とは何か」「いかにして母性は作られたか」への問いさえも提起されるようになってきている。しかし，現段階においてフェミニズムは産む思想を十分には成熟しきれてはいないとの指摘もある[1]。助産婦のケアの対象は第一義的には女性である。女性は産む機能を持っているがゆえに，出産が女性にとって固有の仕事であるという観念を植え付けられてきた。このことによって，母親の側面がクローズアップされすぎ，「子どもを産んで一人前」「子どもを産むことが女性の幸せだ」とする社会通念さえ生まれ今日に至っている。これは，「母性神話」の中で産むことに従属させられてきたという問題意識でもある。このような社会の現状に対して，産む性に多くのかかわりを持つ助産婦はどのように受け止めているのか，また母性イデオロギーの再生産を無意識に行ってはいないだろうか。

以上のような現状認識に基づき，生涯を通じて女性の健康を支援すべき助産婦は，「母性」や「男女の性別役割」をどのように捉えているのか，「母」の強調が必ずしもプラスへの貢献ばかりではなく，一方で子どもと母親の自立を阻み，病理現象への要因を呈していないかを検討するために産科業務の側面から調査を行った。これらの結果をもとに助産学教育について若干の考察を行ったので報告する。

〈用語の解説〉

「母性神話」

女性には自分の産んだ子を慈しみ，守り育てようとする性質が，本能的に備わっているという考え方をいう。この考え方は産む性をもつ女性が育児をするのは自然であり，女性は母親として献身的に子供を育てるべきものとする，「母性」への社会的文化的意味づけが固定化(神話化)されたもの

である[2)]。

「母性イデオロギー」

社会的文化的母性が「母性」として規範化され，女性，母親の生き方を規定するイデオロギーをいう。日本の場合とくに，男女の性別役割分業が今なお強固なこと，歴史的に子どものための母親の献身が高く評価されてきたこと，そして自己犠牲が尊ばれる「子ども中心」の価値観，夫婦よりも親子，とりわけ密接な母子関係(母子密着)が根強いと言った特徴をもつことから，母親自身，女性自身が母性神話を内面化し，これにとらわれている場合が少なくない[2)]。

II．調査方法

1) 調査対象

調査対象は，福岡県内の産婦人科のある病院及び産婦人科診療所22施設に勤務する助産婦291名である。

回収数　246名

回収率　84.5%

2) 調査期間

平成10年12月25日～平成11年1月20日

3) 調査方法

無記名自記式質問紙を用いた郵送による留め置き調査

各施設の看護部長ならびに病棟婦長に依頼し，病棟勤務助産婦全員に配布してもらい，回収後一括して郵送にて返送してもらった。

調査の概要(表1)

4) 分析方法

統計学的解析には，χ^2検定，Fisherの直接確立法ならびにMann-Whitney U検定を用いた。

表1．調査の概要

1. 対象者の属性
2. 職域外での地域活動
3. 女性問題に関する学習
4. 母性イデオロギーへの意識
5. 産科業務への性別役割観とジェンダー的視点
6. リプロダクティブ・ヘルスの概念理解

III．結　　果

1. 対象の属性

調査対象の属性は表2に示すとおりである。

2. 母性の捉え方

女性の健康や権利としての自己決定の重要性が語られようになってきた。そこで出産にかかわる助産婦が多義的な要素を含む「母性」の概念をどう捉えているかをみた。女性は生来的に「母性」に恵まれていると思う者が138名(56.1%)，恵まれているとは思わない者98名(39.8%)であった。また，母になるかならないかは女性の主体的選択に委ねられるべきだとする意見に対し，賛成110名(44.7%)，反対7名(2.8%)どちらともいえない120名(48.8%)であった。これに関連して，女性にとって現在が多様な生き方を選択できる時代だと考えているかを5段階尺度で問うと，「大いに思う」37名(15.0%)，「やや思う」115名(46.7%)，「どちらともいえない」67名(27.2%)，「あまり思わない」22名(8.9%)，全く思わない4名(1.6%)であった。

表2．対象の属性

		(人数)	(%)
結婚	未婚	88	35.8
	既婚	157	63.8
	無回答	1	0.4
子どもの数	いない	169	68.7
	1人	23	9.3
	2人	33	13.4
	3人以上	21	8.5
年代	20代	105	42.7
	30代	75	30.5
	40代	50	20.3
	50代	14	5.7
	60代以上	2	0.8
経験年数	5年未満	88	35.8
	5~10年未満	65	26.4
	10~15年未満	33	13.4
	15~20年未満	26	10.6
	20~25年未満	24	9.8
	25年以上	10	4.1
最終一般学歴	高校卒	199	80.9
	短大卒	33	13.4
	大学卒	13	5.3
	大学院	0	0
	無回答	1	0.4
看護教育	専門学校	202	82.1
	短期大学	42	17.1
	大学	2	0.8
助産婦教育	専門学校	174	70.7
	短大専攻科	71	28.9
	大学	1	0.4

表3.　産科業務を中心に見た性別役割意識

	(人数)	(%)
地域活動への関わり		
ある	57	23.2
ない	186	75.6
無回答	3	1.2
女性問題に関する学習		
ある	66	26.8
ない	173	70.3
無回答	7	2.8
母になるかは女性の主体的選択にゆだねるべき		
賛成	110	44.7
反対	7	2.8
どちらともいえない	120	48.8
その他	5	2.0
無回答	4	1.6
女性は生来的に母性に恵まれていると思うか		
思う	138	56.1
思わない	98	39.8
その他	2	0.8
無回答	8	3.3
良妻賢母という考え方		
大いに賛成	12	4.9
やや賛成	45	18.3
どちらともいえない	140	56.9
やや反対	25	10.2
反対	21	8.5
無回答	3	1.2
女性は多様な生き方が出来る時代と思う		
大いに思う	37	15.0
やや思う	115	46.7
どちらともいえない	67	27.2
あまり思わない	22	8.9
全く思わない	4	1.6
無回答	1	0.4
女性の自我意識の高揚は母性喪失に繋がると思うか		
はい	12	4.9
いいえ	173	70.3
わからない	53	21.5
その他	5	2.0
母親にとって子育ては喜びである		
はい	151	63.4
いいえ	9	3.7
わからない	53	21.5
その他	28	11.4
無回答	5	2.0
「夫は外で働き，妻は家庭を守る」考え方		
賛成	7	2.8
反対	122	49.6
わからない	62	25.2
その他	51	20.7
無回答	4	1.6
新生児への色分け		
必要	23	9.3
区別はしないがよい	19	7.7
物によりけり	107	43.5
どちらでもよい	89	36.2
その他	5	2.0
無回答	3	1.2
育児指導によって子どもを受容できるようになる		
はい	105	42.7
いいえ	25	10.2
わからない	81	32.9
その他	33	13.4
無回答	1	0.4
ジェンダーに敏感か		
はい	35	14.2
いいえ	63	25.6
わからない	126	51.2
その他	4	1.6

中間回答の「どちらともいえない」を除き，肯定群と否定群に分けた場合，年代別による意識に有意差がみられた ($p < 0.001$)。子ども，結婚の有無による有意差は認められなかった。一方，「女性の自我意識の高揚が母性の喪失に繋がる」といった社会通念に対しては，「母性喪失に繋がる」と考える者12名 (4.9%)，「繋がらないと考える者」173名 (70.3%)，「わからない」53名 (21.5%) であった。

3.　伝統的な性別役割意識

「良妻賢母」という考え方をどう思うかについては，「大いに思う」12名 (4.9%)，「やや賛成」45名 (18.3%)，「やや反対」25名 (10.2%)，「反対」21名 (8.5%)，「どちらともいえない」140名 (56.9%) であった。この賛否と年代別意識との関連は認められなかった。また，経済的に余裕があれば母親は育児に専念した方が良いと思うかについて，「はい」62名 (24.4%)，「いいえ」115名 (46.7%)，「わからない」61名 (24.8%) であった。さらに，「夫は外で働き，妻は家庭を守る」専業主婦の考え方については，「賛成」7名 (2.8%)，「反対」122名 (49.6%)，わからない62名 (25.2%) であった。このことと「経済的に余裕があれば母親は育児に専念した方がよいと思うか」との間には関連性はみられなかった。

4. ジェンダー的視点から見た産科業務

妊産褥婦に対する保健指導について，「母親にとって子育ては喜びである」とする考え方を問うた。この考え方に対し，「そう思う」151名(63.4%)，「そう思わない」9名(3.7%)，「わからない」が約2割であった。また，産科病棟内において新生児のリネン類や名札など従来から習慣的に男児と女児の色分けがなされていることについては，「必要である」と考えている者23名(9.3%)，「区別はしない方がよい」19名(7.7%)，「物によりけり」107名(43.5%)，「どちらでも良い」89名(36.2%)であった。子どもの有無から色分けの必要性についてみた場合，有意差が認められた($p < 0.0001$)。一方，女性問題に関する学習経験と男児と女児の色分けに対する考え方には有意差は認められなかった。次に，「子どもを受容できない母親に対しては，育児指導によって変化していくと考えるか」については，「はい」105名(42.7%)，「いいえ」25名(10.2%)，「わからない」81名(32.9%)であった。また，最近，産む人の主体的な出産が叫ばれ自然出産にもいくつかの方法が導入されている。そこで，これらの出産方法をめぐって，医師と意見の相違がある場合に議論をする方かをたずねた。「はい」72名(29.3%)，「いいえ」42名(17.1%)，どちらともいえない128名(52.0%)であった。これは子どもの有無と有意差が認められた($p < 0.0001$)。出産方法については，これまでが医療施設まかせの出産であったとして，消費者側から疑問が投げかけられるようにもなり，出産を見直す機運が高まってきている。この現状をどう思うか問うと，「賛成」185名(75.2%)，「反対」13名(5.3%)，「わからない」35名(14.2%)であった。

5. 職域外での学習経験

職域外での活動を何か行ったことがあるかについて，地域活動への関わりをみた。仕事以外のことで地域活動に関わったことがある者は，57名(23.2%)，ない者186名(75.6%)であった。どのような活動かを自由記載で問うと，少数回答ながら，自治会，青年団，地域での選挙活動，子供会，生協活動，PTA，地区婦人会，老人介護ボランティア，NGO，障害者へのボランティア活動，職種での自主活動などがあげられていた。

一方，女性問題に関する学習を何かしたことがあるかについては，学習経験のある者66名(26.8%)，学習経験のない者173名(70.3%)であった。学習の場としては，少数ではあるが女性センターや市民センター，保健医療職の学会・セミナー，学校教育の場，職場労働組合などがみられた。この少数回答の中で，学校教育の場としての「助産婦教育」の場とする回答が目立った。職場を離れた市民レベルでの地域活動と女性問題に関する学習経験の有無との間に有意差が認められた($p < 0.0001$)。

6. プロダクティブ・ヘルス/ライツの理解

女性の健康と権利のキーワードである「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」の概念について理解していると思えるかを問うた。「理解している」37名(15.0%)，理解していない163名(66.3%)であった。この概念と関連の深いジェンダーへの意識をみると，「ジェンダーに敏感か」については，「はい」35名(14.2%)，「いいえ」63名(25.6%)であった。年代別，一般学歴別，助産婦経験年数別，助産婦教育別の有意差は認められなかったが，子どもの有無による有意差が認められた($p < 0.0001$)。また，「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」の概念理解をしている者はジェンダーを敏感に意識しているとする者が有意に多かった($p < 0.0001$)。

Ⅳ. 考　察

1. 日常性の中の性別役割意識

生理的母性に加えて，社会的文化的母性が規範化されることがまだ根強く残っている現状をどのように受け止めているかを知るための一つの指標にしたいと考えた。助産婦は，主たるケアの対象である女性を「母性」の側面からみた場合，約60%が「母性は生来的に有するもの」と捉えていた。「母性」をどのように定義するのかを明確にしないままでの質問ではあったが，筆者らの過去の調査において「母性愛」を本能だと捉えている助産婦が過半数認められたことと関連があると考

えられる[3]。

「母性」という概念はきわめて不明確であり，プラス面とマイナス面とがあり，領域や用いる人によって多義的である。「母性神話が流通する陰で，実際には母となった女性の多くが子どもへの否定的感情や育児不安で悩んでいる」のも事実である[4]。また「母性」という用語は，「産めない女性」からは母性礼賛への危険性を孕むといった指摘がある[5]。さらに，それは，「性別役割分担の慣習を前提とした価値観を浸透させた用語」であるといった指摘[6]があることとも視野に入れておく必要があろう。

女性が生来的に母性に恵まれているとする考え方が約60%であるのに対し，母になるかどうかの女性の自己決定を肯定する者が約40%と少ない。つまり，助産婦の捉える「母性」はいわゆる「生物学的母性」としての受け止め方であること，さらに社会通念としての「母であること」に一義的に集約されていく女性役割意識であることが考えられる。母性の否定的側面が実在することを視野に入れ，偏らない母性観を持つことが重要であろう。

性別役割分業を代表するともいえる「夫は外で働き，妻は家庭を守る」という考え方については，賛成2.8%，反対が半数であった。この考え方を1992年総理府が行った「婦人問題に関する国際比較調査」[7]と比較すると，日本は56%が賛成である。今回の対象とは大きな較差があった。これは，職業人として働き続けている対象であること，同業種集団のみであること，しかも経済的な自立とともに仕事の中での自己実現の機会をもつ特性からでであろう。加えて，交代制勤務の特性夫婦協働の生活を男女の役割で固定化できない現実があるためと考えられる。

「良妻賢母」の考え方は，賛成が反対をやや上回ってはいるもののどちらも低率で中間回答が多かった。これらの意識は年代別にも関連性がなかった。一方，「多様な生き方が出来る時代」だと60%強が思っており，これは年代別に有意差が認められた。しかし，職業人としての生活に加えた社会参加における多面性はもっていない。

「経済的に余裕があれば母親は育児に専念した方がよい」という考えは，賛否の割合が東京都生活文化局の調査とほぼ同率であった。助産婦としての自己の能力発揮や自己実現を可能にできる資格と環境を有しながら，このことに関しては特性が表れなかった。ジェンダーは関心事ではないこともうかがえる。

2. 産科業務を通しての性別役割意識

ジェンダーの視点をもつことによって，社会の多数派の位置からは見えにくい，とくに性にかかわる多様な問題の捉え方が変わってくる。このことがまた，ジェンダーバイアスに気づくことにもつながる。その視点から産科業務を中心に性別役割意識を検討した。

子育てをどのようにとらえているかについては，約6割が「母親にとって子育ては喜び」であると考えていた。また，「子どもを受容できない母親は，育児指導によって変化していく」と考えている者が約4割であった。育児指導は，病院内にとどまるものから地域でのフォローにつながっていくものまであるが，今回は時間的な違いまでは問わなかった。母親たちの育児は必ずしも喜びにつながらないことが大日向らの育児意識調査により明らかにされている[8]。これによると，「乳幼児期の子どもを持つ母親たちの9割が『育児を辛く思うことがあり』，8割弱が『子どもをかわいく思えないことがある』」といった育児状況が示されている。母親の中には，虐待が想定されるような背景要因，つまり「夫婦関係の荒廃，子ども観の未成熟さ」，子どもを育てることへの自覚の欠如，母親自身の未成熟さなどの要因をもつ者もいる。また，子どもを育てることの責任が母親のみに集中し，性別役割分業は子育てが母親の仕事とも見なされる。このような現実を理解し，助産婦による育児指導が，極端な子ども中心主義に傾きすぎたり，個としての母親を抑圧することにならないよう気を付けなければならないと考える。指導の名の下に保健医療に携わる助産婦は，80年代に強調されてきた母と子の絆論，母子関係論の受容には日本的歪曲との批判が加えられていることも詳細を知った上でなおかつ伝統的社会通念の補強者

とならないよう認識を持つ必要があろう。

公的な仕事の場において慣習化して「自然」で「当然」と思い込んでしまっている部分を見るための一つの例として，産科における新生児のリネン類や名札など色分けを調べた。男女を色分けで区別することに反対する者は10%に満たない。習慣的ではあっても区別することから無意識のうちに性差を通じてジェンダーを再生産してしまうことにもなろう。ジェンダー意識は，学習経験によって大きく異なってくるが今回，女性問題の学習経験者は地域活動の経験をもつ傾向が多少認められた。しかし，職域外での活動範囲が狭く，少数の者に限られていた。このことから助産婦の多くは，職域外での他職種との交流が少ないことがうかがえる。そのためか女性問題に関する学習経験は，必ずしも産科業務の見方に反映するものではなかった。指導のあり方が伝統的性別役割意識を再生産していくことに繋がっていないかを振り返ってみる必要があろう。これに関連することとして，大越はジェンダー化の心理的プロセスを研究したナンシー・チョドロウ，『母親業の再生産』(1978) において，「近代社会の性別分業体制の下で，母親のみが育児担当者であることが，ジェンダーの差異を作りだし，転じてその性別意識がまた再生産される[9]」としたことを重要視している。

最近の自然出産志向をめぐっては医師と助産婦の間で意見の相違がよくみられることがある。出産の施設化により医療化が進んだ。このことにより「産ませてもらう出産」傾向になり，女性が持っている自然性や産む人本位の視点をもった出産を取り戻そうする運動さえ出てきた。この様な見直しの機運を肯定する者が約75%認められるにもかかわらず，多様な出産方法について医師と議論をする方だとする者は約30%である。組織の特性や制約もあって，必ずしも医師と議論することがよい結果を生むとはいえない現実もある。社会学者の船橋は，医師による看護職支配を「垂直関係」と呼び，これを解消して看護の自律性をはかり，医学と看護学が対等に「補い合う関係」になることの重要性を指摘している[10]。主体的出産をめぐって，異なる視点から議論の盛り上がりと実践の試みが期待されているといえよう。助産婦としてのアイデンティティを失うことなく，ケアという側面から女性の側に立った考え方を提示していくことが重要なことであると考える。そのためにも対象の意識の変化について，社会学的視点からの客観的捉え直しを図ることは常に求められてくることである。性と生殖に対応していく助産婦に「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」の概念が果たして理解されているのかを問うた。「理解している」と考えている者は，わずか15%で「理解していない」は70%近くを占めていた。これには年代や学歴，専門教育，業務経験歴の違いでの有意差は認められなかった。リプロダクティブ・ヘルス/ライツは母子保健よりも広い概念であり，これは，比較的新しいキー概念でもある。旧カリキュラムの助産婦教育の中においては，触れられていなかった。しかし，調査対象の各属性とこの概念理解に有意差が認められなかったことから，新カリキュラムによる助産学教育の中においても，十分な理解を得るには至っていないことがうかがえる。この概念は助産学教科書の中では広範にわたって取り上げられているものの，言葉が一人歩きしている現状が推察される。とくにカイロ会議や北京会議以降，行政や女性団体においては，用語としての「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」は頻繁に用いられて定着してきた。今後，助産婦教育においては当然のことながら，勤務助産婦も専門研修等をとおし，生殖の中の母子のみを対象とする意識から女性の健康支援として意識を拡大していく必要があろう。世界規模においてジェンダーの視点から女性の健康の捉え直しが急速に進められている。生涯を通じた健康支援に対して，各職域において何が可能かどのような意識の欠如があるのか社会学的視点からの学習が求められる。

V.まとめ

1. 「女性は生来的に母性に恵まれている」とする考え方は，生殖機能を越えた母親のあり方までも規定するものではなかった。
2. 伝統的性別役割について肯定する者は極めて

低率であった。

3. 女性問題の学習経験は少数であり，産科業務をジェンダー的視点から捉えなおす気運は認められなかった。
4. 職域を離れての地域活動や女性問題学習の経験者は約2割であり，その活動範囲は狭いものであった。
5. 「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」の概念は，殆どの助産婦に十分な理解がなされていなかった。また，これは学歴・年代による有意差がなかった。

VI. おわりに

以上，本稿では主に病院に勤務する助産婦の産科業務を通した性別役割分業観をみた。母性を育み，生命誕生にかかわる助産婦の産科業務における性別役割分業観は伝統的分業観を否定しながらも，それがジェンダー意識に繋がるものではないことがつかめた。しかし，今回は病院助産婦のみを対象としているため，診療所・地域の助産婦を含めると異なってくるものと考えられる。

最後に，本調査にご協力くださいました病院助産婦の方々に深く感謝いたします。

文　献

1) 船橋惠子：赤ちゃんを産むということ，日本放送出版会，16-21，1994
2) 国広陽子，高井葉子他：女性問題のキーワード，p168-169，ドメス出版，1997
3) 松岡ゆう子，平田伸子他：「児童虐待に関する産科看護職の認識」，福岡県立看護専門学校看護研究論文集，21: 183-193，1998
4) 波田あい子：母親を追いつめるものは何か，井上照子。江原由美子編女性のデータブック，有斐閣，28-29，1998
5) 船橋惠子，堤マサエ：母性の社会学，サイエンス社，4-7，1992
6) 原ひろ子：母性から次世代育成力へ，新曜社，222-227，1992
7) 井上輝子，江原由美子：変わる男女役割『女性のデーターブック』，44-45，有斐閣，1998
8) 大日向雅美：母性の発達，季刊精神科診断学，5(3)，1994
9) 大越愛子：フェミニズム入門，ちくま書房，57-60，1996
10) 船橋惠子：赤ちゃんを産むということ [社会学からのこころみ]，129-133，日本放送出版会，1994